

International University of Health and Welfare
「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

2025.1.31 発行

vol.140



「共に生きる社会」めざして

主催 国際医療福祉大学・毎日新聞社
後援 文部科学省・全国高等学校長協会

高校生 作文コンテスト表彰式



受賞者と審査委員そろっての記念撮影

特集

新春のごあいさつ

高校生作文コンテスト表彰式



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

CONTENTS

vol.140

January 2025

02

特集

新春のごあいさつ

高木邦格理事長／鈴木康裕学長
／矢富裕大学院長

04

第13回 高校生
作文コンテスト表彰式

05

上海交通大学医学院附属
瑞金医院看護師研修実施

06

キャンパスレポート

08

トピックス

10

開学30周年の取り組み
令和6年度
学位記授与式・卒業式／
令和7年度 入学式 日程

12

特集

新春のごあいさつ

各病院長・施設長

14

施設インフォメーション

国際医療福祉大学成田病院
国際医療福祉大学病院
国際医療福祉大学三田病院
国際医療福祉大学熱海病院
国際医療福祉大学市川病院
国際医療福祉大学塩谷病院
山王病院

16

キャンパスプラス1
クラブ・サークル紹介

Akasaka basketball club
(東京赤坂キャンパス)

国際医療福祉大学・
高邦会グループ理事長
高木邦格



開学30周年にあたって

2025年を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

日本初の医療福祉の総合大学として1995年に栃木県大田原市に開学した国際医療福祉大学は、本年開学30周年という記念すべき年を迎えました。11月には、本学ゆかりの皆様をお招きし、これまでの30年の歩みを振り返る記念式典を、開学の地である大田原市で開催する予定です。

開学時、大田原キャンパス保健学部5学科からスタートした本学は現在、医療福祉分野のほぼすべて学びの領域をカバーする11学部27学科を展開するほか、6つの附属病院と約60の関連施設を有し、職員数は約13,000人を擁する規模にまで成長を遂げました。

大田原、成田、東京赤坂、小田原、大川の全国5つのキャンパスには、大学院生を含めて約11,000人の学生が学んでいます。開学以来、各学科とも国家試験合格率は全国トップクラスで、これまでに輩出した約35,000人におよぶ卒業生は、各専門分野で責任ある立場として地域の医療福祉に貢献しているほか、国際的にも幅広く活躍し、高い評価をいただいております。

2017年の医学部開設により、本学ではチーム医療・チームケアをこれまで以上に完全な形で学ぶことができるようになりました。医学部は2022年度に完成年次を迎え、一期生・二期生ともに医師国家試験合格率は99.2%（全国第2位）という結果を残しました。特に、1学年定員140人中20人という、日本の医学部では本学が受け入れ最多となっている留学生には、将来母国と日本の架け橋となってくれることを期待しています。

本学はこれからも国際的な医療福祉の総合大学として、日本およびアジアの医療福祉分野の発展と医療福祉専門職の育成に貢献できるよう、時代をリードする新しい教育を見据えてより一層努力してまいります。

卒業生とともに支え合う本学の未来

2025年、本学グループでは、新たな学科、施設を開設予定です。4月には、大田原キャンパスに医学検査学科を開設いたします。医学検査学科は、東北地方および栃木県下の4年制私立大学では臨床検査技師を養成する唯一の学科であり、大川、成田キャンパスに続く、本学としては3番目の開設となります。

同じく4月には、国際医療福祉大学成田病院の隣地に、特別養護老人ホームと介護老人保健施設の複合型施設、「国際医療福祉大学成田老年医療福祉センター」を開設します。これにより、国際医療福祉大学成田病院や3月に承継する成田リハビリテーション病院と連携し、急性期から、回復期、さらに退院後の患者様に対しても、包括的な対応が可能となります。

開学30年を迎え、本学グループは医療福祉分野での一層の貢献をめざし、高度な教育・研究のための環境を整えてまいります。卒業生たちが代々使ってきた校舎、部活動で汗を流してきたグラウンド、実習や研修で使用してきた病院や施設をリニューアルするほか、学生や留学生のための学生寮の建設を予定しています。医療福祉分野での活躍を志して本学で学ぶ学生を、これからは卒業生の皆様とともに支え合っていきたいと思います。ご寄附には「国際医療福祉大学開学30周年記念募金」「大田原市ふるさと納税制度」をご利用いただけますので、ぜひ温かいご支援をお願いいたします。

これからも、本学はグループ全体の機能強化を図りながら、新たなステージへと視野をひろげ、教職員一丸となって取り組んでまいります。新しい1年が皆様方にとって幸多き年となりますよう祈念し、私のご挨拶とさせていただきます。

国際医療福祉大学
学長
鈴木康裕



2025年の新春を迎え、皆様にご挨拶を申し上げます。

医療福祉専門職の地位向上とアジアの医療福祉分野のリーダーを養成することを目標として、1995年に開学した国際医療福祉大学は、今年開学30年を迎えます。開学以来、「病める人も、障害を持つ人も、健康な人も、互いを認め合って暮らせる『共に生きる社会』の実現を目指して」を建学の精神とし、開学以来、真のチーム医療・チームケアの実践には欠かせない存在である、優秀な医療福祉専門職を養成してきました。

本学は、この「『共に生きる社会』の実現」をはじめ、メディカルスタッフと医師が協働する「多職種連携」、そして日本以外の国々の医療福祉分野にも貢献していく「国際性」の3つをテーマに前進してまいりましたが、これからの30年はさらに次の3つをテーマとして進化していきたいと考えています。

まず、1つめは本学が建学の精神としている「『共に生きる社

国際医療福祉大学
大学院長
矢富裕



新たな年の初めを迎え、皆様に謹んで新春のご挨拶を申し上げます。日々のニュースに接するまでもなく、私たちが生きる時代がいかに激動のものであるかを実感されていることと思います。国内外の社会情勢の激変や、地球環境の変動・自然災害、そして科学技術の爆発的な進展など、未来の予測が一層困難となった現在、2024年も例外ではありませんでした。しかし、困難を乗り越えることで、必ず大きな成長と新たなチャンスが訪れると信じて、新たな年が皆様にとって明るく希望に満ちた一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

本学は、1995年に日本初の医療福祉の総合大学として開学し、「『共に生きる社会』の実現」を建学の精神に掲げ、その

会』の実現」を前提として、キャンパス周辺の「地域おこし」を進めたいと考えています。医療福祉の総合大学として、これまで以上に地域の医療福祉の充実に貢献してまいります。2つめは、就労人口が減っていく日本における新しい医療福祉のモデルを本学から作ることをめざします。本学はこれまで、実践を通じて「多職種連携」を学んだ優秀なメディカルスタッフを医療福祉現場に多数輩出してきました。今後の30年は職種を超えた連携に加え、最先端技術との連携も必要になってきます。センサー技術、AI、ICなどさまざまな技術を駆使して、日本の就労人口不足を補えるような、医療福祉の姿をこの大学から作っていきたくと考えています。そして3つめは、国際活動の一層の充実です。留学生の受け入れやインバウンドの患者様の対応など「国際性」を重視してきた本学ですが、今後は海外に病院や研修施設を作るなどアウトバウンドの国際協力にも尽力してまいります。

これらの試みを推し進めていくには、この大学の財政基盤の確立も重要なポイントです。これまでの30年間、優秀な教員による熱心な指導によって、国家試験の合格率においても最も高いレベルを達成してきた本学は、その教育の質の高さが評判を呼び、優秀な学生が集まる好循環のモデルです。こうした好循環が保たれ、将来に生きていくのもしっかりと財政基盤があってこそです。ふるさと納税を通じた寄附も利用できるようになりましたので、本学の教育・研究の充実につながる、皆様からの温かいご寄附をお待ちしております。

本年も教職員一同、皆様に愛される大学となるよう精一杯努力してまいりますので、一層のご支援ご鞭撻をよろしく願ひいたします。

特色を活かしながら着実に発展してまいりました。私は2023年4月に着任しましたが、まさにその発展を実感しています。1999年には大学院が開設され、仕事を持つ社会人にも十分な教育・研究環境を提供できるよう配慮を重ねつつ、着実に規模を拡大させてきました。これまでに約5,000人の修了者を輩出できたことを、とても嬉しく思っております。

いよいよ、本年2025年には開学30周年を迎えます。この激動の時代に対応できる知のプロフェッショナルを育成する教育のニーズは、ますます高まっています。そして、生涯にわたって学び続けることができる、また、多様で柔軟な教育を提供している本学の価値は、今後さらに重要性を増すと考えています。「共に生きる社会」の実現という建学の精神、そして、三つの基本理念「人間中心の大学」「社会に開かれた大学」「国際性を目指した大学」という、いわば、本学の基本・初心を忘れず、しかし、大きく変わりゆく時代に遅れを取らず、さらなる発展を遂げることを願っております。

30周年を迎える本年、大田原キャンパスには医学検査学科が新たに開設され、また、記念式典が予定されています。是非、この記念すべき一年を、誇らしい気持ちで迎え、そして、本学のさらなる発展に繋げることができるよう、教職員一丸となって頑張っていければと思います。

皆様にとってより良い一年となりますよう心よりお祈り申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。本年も何卒よろしく願ひ申し上げます。

新春のごあいさつ

第13回「共に生きる社会」めざして 高校生作文コンテスト表彰式

「第13回『共に生きる社会』めざして 高校生作文コンテスト」(主催・国際医療福祉大学、毎日新聞社、後援・文部科学省、全国高等学校校長協会)の表彰式が12月8日、東京赤坂キャンパスの講堂で開催された。応募総数1,956点の中から厳正な審査の結果、選ばれた最優秀賞、優秀賞、佳作、学校賞の各賞の受賞者が、晴れやかな表情で表彰式に参加した。

高校生ならではの視点で書かれた力作揃い

「医療と福祉、わたしの体験」「誰かのために、私ができること」「多様性を認め合う社会をめざして」という3つのテーマで募集した今回のコンテストでは1,956点の応募があった。テーマについてそれぞれに思いを巡らせ、高校生らしいみずみずしい感性で書かれた力作が数多く寄せられた。

厳正な審査の結果、最優秀賞には、山梨県・山梨英和高等学校2年、若林風歌さんの「とうもろこしのバトン」が輝いた。トウモロコシを畑で育てている祖父が脳梗塞で倒れたとき、医療に携わる人々のチーム、そして近所や親戚、友人など周囲の人々のチーム、という2つのチームが協力し合って祖父の生きる気力を高め、社会復帰につなげることができたことを書いた。



●優秀賞の川原愛梨さん

優秀賞には、広島県・盈進高等学校2年、川原愛梨さんの「そのぬくもり感じて」が、佳作には栃木県・佐野日本大学高等学校3年、川島里菜さんの「あなたと共に生きるということ」と、福岡県・北九州市立高等学校2年、藤崎詩麻さんの「病気が導いてくれたもの」



●最優秀賞の若林風歌さん

が選ばれ、審査委員長の鈴木康裕・国際医療福祉大学学長から表彰状や楯などが贈られた。個人賞では、このほかに入選4人(徳島市立高等学校2年 河野地里子さん、神奈川県・相洋高等学校3年 島袋真雪さん、福島県立郡山高等学校3年 七海翔斗さん、山形県立致道館高等学校1年 早川陽斐さん)が選出された。

団体での応募数や入賞者数などの基準で選ばれる学校賞は、福島県立郡山高等学校、茨城県立水戸第二高等学校、栃木県立矢板東高等学校、神奈川県・相洋高等学校の4校に授与された。

応募作品から感じられる優しくあたたかい心

開会の挨拶で鈴木学長は「本学は建学の精神に『共に生きる社会』の実現」を掲げています。ご応募いただいたすべての皆様の文章から「共に生きる社会」をめざす優しくあたたかい心を感じました。今回の受賞を契機に、さらなる飛躍を遂げることを心より願っています」と祝意を述べた。

審査委員を代表して、毎日新聞社の元村有希子客員編集委員は「皆さんは作文を書くにあたり、ご家族や友人、会ったことのない人々の心の中に思いを馳せて文章を作られたと思います。忙しい学校生活のなかで使ったこの時間と経験は尊いものであり、そのように時間をかけて書かれた作文はまさに今の皆さん方でしか書けない輝きを放つものばかりでした。第三者の思いに想像力を働かせて理解するエンバシー(共感力)は医療福祉分野はもちろん、それ以外の分野でもとても必要で、自分を助けてくれる力となります。これからも大切にしてください」と語りかけた。

受賞を記念して、出席した受賞者4人による作品の朗読も行われた。自らの体験や思いがつけられた内容に、会場から温かい拍手が送られた。

閉会の挨拶で、赤津晴子・国際医療福祉大学副学長が「発信すれば瞬時に『いいね!』が返ってくるSNSとは違い、作文を書くということ

は時間のかかる苦しい作業ですが、ちょうどジムで筋トレをするように将来の自分に返って来るものでもあります。自分を高める作文に触れることができるこのコンテストが、高校生の皆さんの日々の生活に少しでも役立てれば幸いです」と締めくくり、高校生作文コンテストの表彰式は和やかな雰囲気の中幕を閉じた。



●表彰式に参加した個人賞・学校賞受賞者の皆さん

上海交通大学医学院附属瑞金医院の 看護師30人研修受け入れ実施



●修了式にて鈴木康裕学長ら本学関係者と参加者全員で記念撮影

上海交通大学医学院附属瑞金医院は中国の主要大学・上海交通大学の医学院(日本の医学部にあたる)附属病院で、1907年に設立された。本学は、この中国国内でも歴史ある総合病院からの依頼に応じ、同病院の看護師のスキル向上と高齢者ケアに関する知識習得を目的とした研修を、11月18日からの約1か月にわたり実施した。

現在、日本同様に超高齢化社会を迎える中国では、高齢者看護・介護の充実が課題となっている。今回の研修受け入れにあたっては、中国が直面するこうした社会的背景に加え、国際的に高く評価されている本学の充実した教育環境での質の高い学びや、豊富な関連施設での現場経験を、ぜひ体験させてほしいという上海交通大学医学院附属瑞金医院からの熱意あふれる依頼が本学にあり、実現した。

受け入れたのは同病院の看護師のうち、5年以上のキャリアを持つ師長クラス30人で、研修では「国際医療福祉大学高度看護研修コース」を受講した。

研修は、栃木地区の国際医療福祉大学病院、同塩谷病院、マロニエ苑、国際医療福祉リハビリテーションセンターなどで行われた。福井トシ子副大学院長はじめ本学の教員による座学に加え、病院・福祉施設での実習など、日本の保健医療制度・介護保険制度、高齢化社会の医療とリハビリテーションの現状、本学の看護教育などを学んだほか、キャンノンメディカルシステムズの工場を見学した。

続く日程では、千葉県成田地区と東京地区において、国際医療福祉大学成田病院、国際医療福祉大学三田病院、山王病院、新宿けやき園などを視察。研修に参加した看護師からは「教育環境と豊富な関連施設、充実した医療提供体制に刺激と感銘を受けた」「1か月間の研修で得た経験や知識はハイレベルなものだった」などの声が上がった、高い評価を得た。

研修最終日の12月16日、東京赤坂キャンパスで行われた修了式・懇親会には、寧光(ニン・グアン)院長、邱力萍(チウ・

リービン)副院長など同院関係者8人が参加した。修了式では、本学の三浦総一郎専務理事(前本学大学院長)、福井トシ子副大学院長(前日本看護協会会長)、生涯学習センター長の看護部門統括責任者で本学グループ病院の小見山智恵子統括看護部長(前東京大学医学部附属病院 副院長／看護部長)が出席するなか、鈴木康裕学長が、「各施設での研修を通じ、急性期医療の国際医療福祉大学病院、慢性期医療も兼ね備えた塩谷病院など、附属病院を中心とするグループ施設が、この地域で生活する方々に幅広く良質な保健・医療福祉を提供していることをご理解いただけたと思います。開学から30年間、『チーム医療・チームケア』の教育を実践してきた本学の取り組みを体験された皆様が、今後母国で高齢者介護のレベルアップに貢献されることを期待しています」と挨拶し、一人ひとりに修了証を手渡した。

研修を通じ、今後さらなる高齢化を迎える日本と中国において、高齢者看護・介護のレベルアップに向けて活発な連携と交流が期待されている。



●修了式で挨拶を述べる鈴木学長



●修了証を手に笑顔の研修生

大田原キャンパス

「第21回学生&企業研究発表会」本学より参加した全グループが受賞

第21回学生&企業研究発表会（大学コンソーシアムとちぎ主催）が開催された。本発表会は、栃木県内の大学や企業が一堂に会し、「環境エネルギー」「医学・医療・福祉」など4つの分野で、学生が主体となった日頃の活動内容を発表するイベントである。本学からは4グループが参加し、動画視聴形式の分野別発表会を経て、各分野から選考された10グループが進出する11月30日の最優秀賞選考会（宇都宮共和大学）で、2グループが発表を行った。

薬学部の工藤真紀さんほか4人が、最優秀賞（知事賞）に次ぐ、関東経済産業局長賞を受賞。薬学研究科の堀松星翔さんほか1人が栃木県経済同友会賞を受賞した。最優秀選考会には進出できなかったものの、理学療法学科の小林礼奈さんほか5人が栃木県信用保証協会賞、薬学部の工藤一樹さんほか3人が救命丸賞を受賞し、4グループ全てが受賞という大変すばらしい結果となった。

（総務課 深澤望）

- 関東経済産業局長賞
「体毛からI型・II型糖尿病を発症する可能性を数値化する」
薬学部5年 工藤真紀ほか4人
- 栃木県経済同友会賞
「地域素材を用いた持続可能な社会の創り手を育成する理科教材の開発（共同研究：（有）すどう 須藤製茶）」
薬学研究科3年 堀松星翔ほか1人
- 栃木県信用保証協会賞
「乳房組織を有する心肺蘇生訓練用マネキンの作製および胸骨圧迫の質の検討」
理学療法学科4年 小林礼奈ほか5人
- 救命丸賞
「夜間の携帯電話やタブレット画面からの光が誘発する健康障害」
薬学部5年 工藤一樹ほか3人



●最優秀賞選考会が行われた宇都宮共和大学にて。「関東経済産業局長賞」を受賞したメンバー（前列左から6人目：工藤真紀、7人目：宮崎瀬里奈、8人目：高橋優輝、9人目：工藤一樹）

東京赤坂キャンパス

4年生による 就活体験報告会を開催

12月4日、4年生代表4人による就職活動体験報告会が開催された。就職活動を終えた学生たちが、毎年この時期に、自身の経験や学びを後輩たちに共有する場として行われている。

報告会では就職活動の準備から面接対策、内定獲得までの具体的なプロセスについて発表した。ほかにも、直面した困難やそれを乗り越えるための工夫、成功の秘訣などを解説し、参加した1～3年の学生たちにとって大変参考になったようだ。

また、全員の発表後には教員からの考察の時間も設けられ、就職活動を行った学生の目線だけではなく、客観的な意見も聞くことができた。これにより、就職活動に対する不安や疑問が解消され、今後の活動に向けてのモチベーションが高まったとの声が多く寄せられた。

このような報告会は、就職活動を控えた学生にとって有益な機会となるため、今後も開催し、学生のキャリア支援を強化していく予定である。

（事務部 小野剛）



●自身の体験を語る4年生



●医療マネジメント学科・石川ベンジャミン光一学科長もアドバイス

小田原キャンパス

DMATを招いて 「総合講義」を開講

12月6日の「総合講義」に国際医療福祉大学熱海病院DMAT（災害派遣医療チーム）の堀内義仁医師、石和大医師をはじめ看護師2人並びに理学療法士1人を講師としてお招きした。

能登半島地震での活動を踏まえた講話は勿論のこと、「トリアージの模擬実演」は、学生たちに強い印象を与えた。実演開始前には「何が始まるのか」と期待の表情であった学生たちも、実演が進むにつれて、隊員たちの真剣な行動に圧巻され、最後には、崇高な使命を果たしているDMAT隊員への尊敬と憧れの表情へと変わっていった。将来、この学生の中からDMATを志す者が出るかは措くとしても、今回の講義は医療人としての使命と自覚を学生たちに強く促すものであったことは間違いないものと思われる。

（学務課教務係 木村和夫）



●傷病者処置模擬実演の様子



●トリアージ模擬実演の様子

成田キャンパス

2024年度 国際医療福祉大学 合同慰霊祭及びご遺骨返還式

11月2日、成田キャンパスにて「2024年度国際医療福祉大学合同慰霊祭及びご遺骨返還式」がご遺族、教職員、学生など約300人の参列のもと挙行された。

ご献体された方は生前にご自分の死後、医学生の解剖学実習のためにご遺体を提供することを登録、ご遺体は亡くなった後にご遺族から提供される。学生は解剖学実習を通して医療従事者として学び、成長することから、医療従事者と患者様との信頼関係の原点といわれる。

合同慰霊祭では参加者全員で医学教育、研究のためにご献体された方々に黙とうを捧げた。続いて、鈴木康裕学長が追悼のことば、献体の会代表を務める坂元亨宇医学部長がお礼のことば、医学部3年生学生代表大和田瑞貴さんが感謝のことばを述べた。そして、参加者全員が一人ひとり祭壇に献花した。

合同慰霊祭に引き続きご遺骨返還式が行われ、坂元医学部長からご遺族にご遺骨が返還された。解剖学の小阪淳教授の挨拶で閉会した。

（広報 城貴弘）



●会場の様子



●参加者による献花

大川キャンパス

「SAGA 2024 全国障害者スポーツ大会」で理学療法学科の学生が活躍

10月26日から28日に佐賀県で開催された全国障害者スポーツ大会に、本学理学療法学科の教員と、パラスポーツ指導員資格を持つ学生58人が参加した。そのうち6人は福岡県や佐賀県の選手団役員として帯同し、6日間にわたり選手のサポートを行った。また、そのほかの学生はパラ陸上競技の運営スタッフとして活躍し、選手誘導や測定補助など、競技運営を多方面で支えた。

本学の理学療法学科では、1年次に初級、3年次に中級パラ

スポーツ指導員の資格を取得できる。この資格取得の過程で、学生は学外で多くのパラスポーツボランティア活動に参加し、実践的な経験を積んでいる。その成果として今大会では、大会運営に参加した本学科の学生の高い対応力が評価され、関係者からも多くの称賛の声をいただいた。学生にとっても、大会を通じてさまざまな障害者の方々と触れ合い、スポーツに真剣に取り組む姿に触れることで、理学療法士を目指すうえで貴重な学びの場となった。

（理学療法学科講師 下田武良）



●出場選手とコミュニケーションを図る学生



●全国障害者スポーツ大会に参加した本学学生

ベトナムのリハビリ・シンポで西田学部長、角田教授が基調講演

ベトナムのホーチミン市リハビリ病院で2024年度リハビリテーション・シンポジウム（同病院主催）が11月22日に開催され、本学から成田保健医療学部の西田裕介学部長と医学部リハビリテーション医学科の角田亘教授が基調講演を行った。

同病院のファン・ミン・ホアン病院長が、本学が3月に開催した日越外交関係樹立50周年記念事業として成田で開催したベトナム医療関係者研修会に参加した際、シンポへの招待があり、実現した。本学からの参加は初めて。

このシンポジウムの基調講演は海外から4人の専門家が行った。冒頭講演を行った角田教授は「急性期医療現場における臨床リハビリテーション〜日本の最近の話題」、3人目に登場した西田学部長は「日本の理学療法教育の現状と今後の展望」とそれぞれ題して基調講演をした。参加者たちは日本のリハビリの現状に熱心に耳を傾けていた。



●角田教授の講演

このほか基調講演では、台湾・長庚大学の呉菁宜教授が「運動機能を回復するためのミラーセラピーと組み合わせた非侵襲的な脳刺激とEEGマーカーの適用」と題して、また、米バージニア州のウィリアム・コリンズ博士が「筋骨格系の診断と評価におけるパラダイムシフト」と題して講演を行った。

このシンポジウムはベトナムにおけるリハビリ分野の発展を目的として行われており、ベトナム全土から同国保健省関係者のほか、リハビリ分野をリードする医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士ら約300人が参加した。

西田学部長と角田教授は同日夜、同国で活躍する本学出身者の看護師らを招いての同窓会に出席。旧交を温めたほか、翌23日には、国立チョーライ病院と共同で開設したドック健診センター（HECI）を始め、ホーチミン医科薬科大、ファム・ゴック・タック大などを視察した。



●ドック健診センター（HECI）で

ADLシミュレーションルームを開設
学びの質向上に最新機器導入 大田原キャンパス

障害がありながらも残った身体の機能を生かし、最先端の電化製品や福祉機器を工夫して自力で在宅生活を送る。そうした日常生活活動（ADL）について学ぶため、大田原キャンパスは演習室を改修新たに「ADLシミュレーションルーム」を整備した。

開学当時は最先端の環境を整え、一般家庭を再現した演習室だったが、この30年間で通信環境（ネットワークとICT機器）や電化製品（IoT家電）は目覚ましく進化。日本人の生活スタイルも大きく変容したことから、学びの質向上を狙い、時代に合わせた形にリノベーションした。

音声、呼気、タッチ操作で家電や電動ベッドなどの機器を制御する最新機器を設置し、車いすなどでも使いやすい一般家庭のキッチン、リビングを再現したほか、浴室、トイレのシミュレーターも整備した。自動車運転シミュレーターの導入も検討しており、疾患や事故による片まひ生活、車いす生活、寝たきり生活を送る方が、筋収縮や呼吸、視線、音声、脳活動などの残存機能を生かしてさまざまな電化製品、福祉機器を操作できる環境を整えた。

作業療法学科を中心に学生たちがADLの評価や支援を学ぶ科目で活用するが、二次活用として地域に開放するプロジェクトも現在進行中。大田原市の協力を得て同市内の地域包括支援センター職員やケアマネジャーに周知を図り、見学、体験、相談などの場に

し、福祉機器体験の拠点として大田原市に限らず、栃木県北を中心としたニーズに合わせた施設利用を展開していく計画で、大田原市の担当者も「実際に見られる機会は少なく、必要とする人の利用促進につながる」と期待を寄せている。

医療福祉分野の幅広い学科をもつ大田原キャンパスの特長を生かし、各専門職が必要に応じて助言する体制の構築も進めており、作業療法学科の関森英伸学科長は「私たちの対象は障害の有無にかかわらず『困り感』のあるすべての人。われわれ専門職の強みを生かした地域貢献活動を展開していきたい」と話している。



●最新機器をそろえたADLシミュレーションルーム

小田原キャンパス体験型市民公開講座を開催

小田原キャンパスでは、11月17日、恒例の体験型市民公開講座「知っていますか？ 自分の身体 やってみよう!! 健康実践2024」を開催した。

この講座は通常の講演型ではなく、学生が中心となって参加者の身体機能の測定を行い、その結果に基づいたアドバイスを行う内容。毎年この機会を楽しみに参加するリピーターも多く、開場前の受付付近では、待ちわびる人々であふれかえる光景も見られた。

今回も、ストレス測定、身体測定、認知機能の検査などの体験講



●唾液に含まれるアミラーゼ酵素からストレス度を測定

座を実施し、参加者は学生たちとの交流を楽しみながら自身の身体をチェックしていた。

すべてのプログラムを終え、笑顔で会場を後にする参加者の姿がとても印象的であった。



●2ステップテストでロコモ度を測定



●頭と体を使って健康感をチェック

本学卒業生インタビュー 作業療法士 山口理貴さん

2024年6月12日付の下野新聞「気になるとちぎ 話題の人に聞く」で取り上げられた本学卒業生の山口理貴さん（大田原キャンパス作業療法学科2009年卒業・11期生）。現在、作業療法士・津軽三味線奏者としても活躍していることから、「二刀流アーティスト」と紹介された。2018年に、障害者と地域の支援を行う一般社団法人Bridgeを立ち上げ、代表理事も務める。現在どのような活動をしているのだろうか。

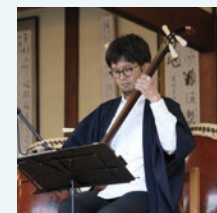
「作業療法士の資格を生かして、障害のある人が力を発揮するための就労支援や、働きやすい職場環境づくりのための企業支援を行うほか、障害者雇用と就労支援の両方に強い地域づくりにも取り組んでいます。就労支援で対象となる方の障害は身体・発達・精神・知的など幅広いため、大学で障害の基礎を学んでいたことが役立っています。また、悩んだときに相談できる大学の先生や同窓生がいることにも心強さを感じています」

津軽三味線奏者としては、伝統的な津軽三味線演奏や民謡伴奏のほか、近年はギターやピアノとのコラボレーションなども行い、栃木県民謡のアレンジや制作にも携わる。大田原キャンパス時代の思い出を聞くと「平日夜に那須や日光の観光ホテルで演奏することもあり、授業を終えて演奏に行き、ホテル泊後そのまま大学に行く

こともある多忙な日々でした。大学のボランティアセンターに声をかけていただき、グループ施設、地域の催事で演奏したり、カンボジアの支援団体の方からお声がけいただき、現地の学校や大学で演奏・音楽指導に行ったこともあり、国際交流に関われる貴重な体験もできました」と語った。

高校時代、芸術活動と親和性のある作業療法士を将来の進路に選択した山口さん。「作業療法士としても津軽三味線奏者としても人の豊かな生活のために役立ちたいという思いは同じです。これからも地域の方々に役立てる活動を行いたい」と決意を明かした。

最後に今年開学30周年を迎える本学の在学生たちに「豊かな想像力を大切に育み続けてください」とメッセージを送った。



●津軽三味線の演奏活動



●職場で使いやすいテーブルの検討をする山口さん

キャリアやライフプランの選択肢の1つに！ 卵子凍結を含むプレコンセプションケア

将来の妊娠を考えて、女性やカップルが自身の健康や日常生活に向き合うプレコンセプションケア。山王病院の堤治名誉病院長が中心となって、2023年7月よりプレコンセプションケアの一環として山王病院において社会的卵子凍結を開始している。2024年12月23日には、堤名誉病院長から鈴木康裕学長に、卵子凍結に対する取り組みを学内外に発信することを通じて、最終的に日本の少子化対策の充実を考えていく提案が行われた。

卵子凍結は将来の妊娠出産に備え、健康な女性が卵子の加齢による妊娠力の低下を回避し、年齢の若いうちに質の良い卵子を採取し、凍結・保存しておくことである。キャリアプランやパートナーの不在などのさまざまな理由から、妊娠について時間をかけて考えたい場合、卵子凍結は女性のライフプランの選択肢の1つとなる。欧米では卵子凍結の費用への助成などを企業が中心となって行っており、企業価値および企業イメージアップや、優秀な女性の流出防止・人材確保にとって必須の取り組みとされている。

日本においても卵子凍結に対して自治体と企業が助成を開始するなか、学校法人では本学が初めて、2024年1月1日より本学職員およびその家族が山王病院で卵子凍結をする場合の費用に、一

定の割引が適用されるようになった。他クリニックと比較するとリーズナブルな設定となっている。（※詳細は下記HP参照）

また、本学は2005年より大学院医療福祉学研究科内に生殖補助医療肺培養分野をいち早く発足させ、体外受精や卵子凍結を実質的に実施する胚培養士の育成を行ってきた。こうした取り組みを通じ、本学は社会で活躍する女性を応援し、日本の少子化対策の充実にも貢献している。

■山王病院の社会的卵子凍結にかかる費用について
<https://www.sannoclc.or.jp/hospital/repro/>



■お問い合わせ先
【山王病院リプロダクションセンター】
電話：03-6864-0489
電話受付時間：日曜を除く14:00-17:00
※年末年始など一部の日を除き、祝日（祝日は03-3402-3151）にも予約およびお問合せを受け付けております。
メール：sanno-rdc@iuhw.ac.jp

国際医療福祉大学は2025年 開学30周年を迎えます！

開学30周年の今年、本学では開学の地である大田原市で11月に記念式典の開催を予定している。

記念式典には本学ゆかりの皆様を招き、さまざまな企画を実施する。式典を通じて国際医療福祉大学の開学から30年間の歩みを振り返る予定だ。

1995年4月8日
国際医療福祉大学
第1回入学式

わが国の医療系大学で初の「医療福祉の四年制総合大学」には多くの受験生が集まり、一般入試の倍率は14倍を超える人気ぶりだった。高倍率のなか入学した学生たちが晴れやかな顔で入学式に集まった。



令和6年度 学位記授与式・卒業式／令和7年度 入学式

	令和6年度 学位記授与式・卒業式	令和7年度 入学式
大田原キャンパス	令和7年3月11日(火) 11:00～ 大田原キャンパス 那須アスリーナ(体育館)1階	令和7年4月8日(火) 11:00～ 大田原キャンパス 那須アスリーナ(体育館)1階
成田キャンパス	令和7年3月9日(日) 11:00～ 国際医療福祉大学成田病院 成田国際ホール	令和7年4月6日(日) 11:00～ 国際医療福祉大学成田病院 成田国際ホール
東京赤坂キャンパス	令和7年3月8日(土) 10:30～ 東京赤坂キャンパス1階 講堂	令和7年4月9日(水) 11:00～ 東京赤坂キャンパス1階 講堂
小田原キャンパス	令和7年3月7日(金) 10:20～ 小田原キャンパス本校舎 講堂	令和7年4月7日(月) 11:00～ 小田原キャンパス 城内校舎 体育館
大川キャンパス	令和7年3月5日(水) 13:00～ 大川キャンパス 講堂	令和7年4月3日(木) 11:00～ 大川キャンパス 講堂
塩谷看護専門学校	令和7年3月4日(火) 10:00～ 塩谷看護専門学校 講堂	令和7年4月9日(水) 10:00～ 塩谷看護専門学校 講堂

本学のSDGsの 取り組み紹介

<https://www.iuhw.ac.jp/sdgs/>



「共に生きる社会」×「持続可能な未来」実現を目指して

国際医療福祉大学は開学以来、「『共に生きる社会』の実現を目指して」という建学の精神の下、医療福祉分野に数多くの医療人を送り出してきた。各キャンパスでは、これまでの30年への感謝とこれからの30年への希望を込め、建学の精神にも通じるSDGs*「持続可能な未来」の実現をめざし、学生、教職員が一体となって活動している。各キャンパスの取り組みを一部紹介する。(詳細はHP参照)

* SDGsとは、貧困の撲滅、地球環境の保護、そして全ての人が平和と繁栄を享受できる社会の実現をめざす国際的な目標である。

大田原キャンパス

ボランティア活動等

- ・ 国道461号ラベンダーロード計画の推進
- ・ 大田原マラソン大会運営ボランティア
- ・ 被災地支援のためのベルマーク運動
- ・ 「与一まつり」への参加



認知症カフェの開催

大田原市と協働で月に1回「大学オレンジカフェin大田原」として開催。患者様や家族が、相談したり、創作活動を行ったりすることができる機会を提供。



成田キャンパス

フードバンク

学生有志によるボランティア活動で集まった食品や文具などを、成田市社会福祉協議会へ寄付。これらの品々は、「フードパントリーなりた」で配布される。



郷土論

千葉県あるいは成田市の人文、社会科学領域にかかわる専門家や第一人者をゲストスピーカーとしてお招きし、それぞれの分野での知見や考察を語っていただく講座を実施。第2・4・5・6回については一般公開し、地域の皆様にもご参加いただける形式をとっている。



東京赤坂キャンパス

バラスポーツ

障害をもつ人も健常な人も参加できる運動会を毎年実施。ポッチャ、モルックを行い「共に生きる社会」を実現。



地域についての学び

地元神社の方や町会長をお招きし、赤坂地域の地元との交流や、地域の歴史について理解を深める。



小田原キャンパス

エコキャップ活動の実施

市内福祉団体と連携し、ペットボトルキャップ回収に積極的に取り組み、再資源化、再利用化を推進している。



体験型市民公開講座の実施

健康に役立つ「講演型」の市民公開講座、実際に体を動かして様々な計測を行う「体験型」の市民公開講座をそれぞれ開催している。



大川キャンパス

敬称としての『さん』の使用

作業療法学科では、教員が学生を呼ぶ際に呼び捨てを避けるとともに、性差を意識しない対応を心がけるため、男女を問わず名前に「さん」を付けて呼ぶことを徹底している。



有明海の水産資源の理解

有明改の生態系維持は課題であり、地元でも重要な関心事である。その理解と保全への関心は、地元で暮らすすべての人にとって重要である。



国際医療福祉大学成田病院

病院長 吉野 一郎

九州大学卒、医学博士。前千葉大学大学院医学研究院呼吸器病態外科学教授、同大医学部附属病院副院長。日本呼吸器外科学会理事・第35回学術会長、日本肺癌学会常任理事・第64回学術会長、アメリカ外科学会（ACS）・アメリカ胸部外科学会（AATS）・ヨーロッパ胸部外科学会（ESTS）正会員。



昨年6月に病院機能評価（一般3）が無事認証され、日々の取り組みが社会に認められた喜びを胸に、職員一同高い士気で励んでまいりました。10月からは500床体制とし、合わせて病棟や診療科別の日々の病床稼働・利用状況を“見える化”し、柔軟かつ積極的な病床運営を促しました。その結果、入院単価を維持しながら入院患者数増を達成することができ、持続可能な病院運営への道筋が見えてきました。また、麻酔科・手術室の尽力により、手術枠増設や急患手術の受け入れ増加、2台目の手術支援ロボット「hinotori」の順調な稼働など、外科系診療は質量ともにグレードアップしました。さらに、無菌室の整備により、血液内科・腫瘍内科などの薬物療法も充実しております。本年度は、臓器移植や周産期・新生児医療などさらなる機能拡大をめざしつつ、特定機能病院の指定に向けスタッフ一丸となり尽力してまいります。

4月からは、成田地区に成田老年医療福祉センターと成田リハビリテーション病院という2つの施設が加わります。3施設の個性を生かした連携により、地域の医療と福祉にこれまで以上に貢献してまいります。

今年の目標は、機能強化と収支均衡を両立させていくことです。已年にあやかり、1年間強くしなやかに成長していきたいと存じますので、本年もご指導とご支援をよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学市川病院

病院長 大谷 俊郎

慶應義塾大学卒、医学博士。慶應義塾大学名誉教授・前医学部整形外科教授・医学部スポーツ医学総合センター教授・看護医療学部教授。日本整形外科学会認定整形外科専門医・スポーツ医・脊椎脊髄病医、The Best Doctors in Japan(2018～2020)。



2024年元日に発生した能登の大地震とその後の豪雨災害で被災された方々に、心からお見舞い申し上げます。市川病院のある医療圏では、新型コロナウイルス感染症は社会的には沈静化したとみなされていても、医療施設や高齢者施設では現在もまだまだ気の抜けない状況が続いております。6月に行われた医療費改定は、当院のような中規模病院にはきびしい多くの変更が行われ、対応を迫られた1年になりました。そのような中で当院は、全職員の献身的な協力により通常診療の継続に尽力し、患者様サービスの向上と経営の改善をめざしてまいりました。泌尿器外科、脳神経外科、総合診療科などの医師を増員し、学生教育においても、学内外からの学生実習に対応してまいりました。

2024年は医療の世界でも働き方改革が本格始動し、耐性菌を含めたさまざまな感染症の動向も気になるころではありますが、2025年も当院は、地域の皆様が安心してかかれる病院、また職員にとっても働きやすくやりがいのある病院でありたいとの思いで、さらに前進してまいります。特に当院の強みであるリハビリテーション医療をさらに強化していくことを大きな目標としております。本年もよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学病院

病院長 鈴木 裕

東京慈恵会医科大学卒、医学博士。第25回PEG・在宅医療学会学術学会会長。日本外科学会認定指導医、日本消化器外科学会認定消化器外科専門医、日本消化器内視鏡学会認定指導医。



2020年の春から始まったコロナパンデミックは、私たち医療従事者にとって未曾有の挑戦でした。その困難を経て、今の私たちに求められているのは、コロナで得た経験をもとに医療のイノベーションを推進することです。遠隔医療の導入や多職種連携など、コロナが契機となって発展した多くの事象は、今後も医療の質を向上させる大きな力となるでしょう。

昨年3月には、当院で臨床実習に励んだ国際医療福祉大学医学部の二期生が医師国家試験に挑み、合格率「全国2位」という優秀な成績を残しました。なかでも海外留学生たちの合格については、大変喜ばしく思います。また、昨年は10人の臨床研修医が入職し、そのうち海外留学生2人を含む4人が国際医療福祉大学の出身者でした。今年も多くの臨床研修医が入職する見込みです。地域医療の発展には豊富な医師のマンパワーが必要不可欠ですので、持続可能な医師の確保と養成は、当院の重要な責務と認識しております。

当院は、これからも高度な医療をご提供し、地域への貢献に努める所存です。医療の進歩を追求しながら、患者様一人おひとりに寄り添ったケアを大切に、さらなる医療の質の向上に取り組んでまいります。

昨年は、多くの方々のご支援とご協力により、すばらしい成果をあげることができました。本年も引き続き、よろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学塩谷病院

病院長 佐藤 敦久

新潟大学卒、医学博士。前国際医療福祉大学三田病院副院長。日本内科学会認定指導医・総合内科専門医、日本高血圧学会認定指導医・高血圧専門医、日本腎臓学会認定指導医・腎臓専門医、日本内分泌学会認定指導医・内分泌代謝専門医。



2025年は巳年です。巳年の「巳」という漢字は、胎児の形に由来しており、「新しく産まれてくる」「将来・未来がある」「家族が平和になる」といった意味があるそうです。新しい挑戦や変化に対して、前向きな姿勢を示す年といわれています。私たちも皆様のご協力を仰ぎながら、さらに質の高い医療をご提供できるよう邁進したいと思います。今年も変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

さて、当院は2024年10月から病床41床を国際医療福祉大学病院に移転し、新たに199床（一般急性期病床109床、回復期リハビリ病棟46床、療養病棟44床）で稼働しています。職員も新たな環境に慣れ、病床稼働も順調に推移しております。

また、臨床研修医の地域医療研修も積極的に受け入れてまいります。若い意欲のある医師たちが勤務に加わり、活気ある環境になっています。私たち指導医も全力で彼らをバックアップし、将来の塩谷病院を担える人間力の高い優秀な医師に育てていく所存です。

- 国際医療福祉大学成田病院 ●国際医療福祉大学市川病院 ●国際医療福祉大学病院 ●国際医療福祉大学塩谷病院 ●国際医療福祉大学三田病院 ●国際医療福祉大学熱海病院 ●山王病院 ●高木病院 ●国際医療福祉リハビリテーションセンター

国際医療福祉大学三田病院

病院長 池田 佳史

慶應義塾大学卒、医学博士。慶應義塾大学客員教授。日本消化器外科学会認定指導医・消化器外科専門医、日本外科学会認定指導医・外科専門医、日本内分泌外科学会指導医・専門医。



昨年は、元日に能登半島で最大震度7の揺れを観測する大地震が発生し、2日に羽田空港で日本航空の旅客機が海上保安庁の航空機と衝突・炎上するという、災害から始まる年でした。

また、日本病院会・全日本病院協会・日本医療法人協会が行った病院経営定期調査では、病院の外来・入院患者数が新型コロナウイルス禍前の水準まで回復せず、全国的に病院経営がきびしさを増していると報告されています。特に、東京都の病院の経常損失は全国平均を3割上回り、赤字の病院は全体の半分以上を占めていると報告されています。

そのようなきびしい中、職員の皆様の尽力のおかげで、なんとか2024年を乗り越えることができました。ありがとうございます。

2025年は国際医療福祉大学開学30周年の記念の年ですが、三田病院も、2005年に東京専売病院を継承してちょうど20年の節目の年となります。これからも、三田病院の培った伝統を維持し、新しいことに挑戦していきたいと考えています。まさに、今年の干支の「乙巳」のように、脱皮して努力を重ね、物事を安定させていく年となるように、職員の皆様と団結して進んでまいります。本年もご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉大学熱海病院

病院長 山田 佳彦

日本医科大学卒、横浜市立大学大学院修了、医学博士。日本内分泌学会認定指導医・内分泌代謝科専門医、日本糖尿病学会認定指導医・糖尿病専門医、厚生労働省認定臨床研修指導医、日本内科学会認定指導医・総合内科専門医、インフェクションコントロールドクター。



当院は地域の中核病院として各分野での専門的な治療の他に、超高齢化地域における地域医療、救急医療に努め、昨年より整形外科や循環器内科を中心に新たな体制でスタートしました。

また、労働基準法の改正に伴う新たな取り組みとして、医師や看護師をはじめ各医療スタッフの労働環境や働き方を継続的に見直してまいります。ICTの活用やタスクシフティングを進めることで、各医療スタッフの業務分担を見直し、医療の質の向上、業務量の削減、超過勤務の削減、人手不足の解消の実現に努めていきたい所存です。

マイナ保険証の導入も本格化しており、今後はデジタル医療の推進にも対応しつつ、患者様サービスの向上につなげてまいります。災害拠点病院、地域がん診療病院等の機能を有しながら、静岡県東部、伊豆半島全域、神奈川県西部の医療を支える中核病院として、引き続き地域の皆様に安心して利用いただける病院をめざし、職員一同一致団結し邁進してまいります。本年もご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

山王病院

病院長 藤井 知行

東京大学卒、医学博士。日本学術会議第2部会議員、前東京大学産婦人科主任教授、日本産科婦人科学会第4代理事長、国際医療福祉大学大学院・医学部教授、国際医療福祉大学グループ産婦人科統括教授。



社会はコロナウイルス流行前の日常を取り戻しましたが、病院受診者の減少はなかなか回復せず、どの病院も運営上の試練に耐え、立ち向かっています。また、わが国の少子化が急速に進行し、多くの病院で出産数が減少しています。山王病院のモットーは、「患者様本位の医療の提供」です。当院では、診療科での対応がむずかしい場合に総合診療チームがフォローする医師チーム制や、出産後の育児や生活の支援を目的とした産後ケアの導入など、患者様本位の医療サービスをめざし、病院機能のさらなる強化を図っています。幸い、当院の出産数は増加しており、今後も患者様の健康回復と維持を第一に、その結果として患者様からの支持を得て、病院の運営を安定させる努力をしてまいります。今年もよろしくお願い申し上げます。

医療法人社団 高邦会 高木病院

病院長 筒井 裕之

九州大学卒、医学博士。前九州大学循環器内科学教授。元北海道大学循環病態内科学教授、同大副院長。第87回日本循環器学会学術学会会長、日本心不全学会前理事長。国際医療福祉大学副学長、副大学院長、医学部・大学院教授。



昨年も、地域の基幹病院として年間3,000件近くの救急患者様を受け入れるとともに、質の高い医療を安全にご提供することができました。感染症対策を継続しながら、献身的に診療に従事した全職員に心から感謝いたします。当院は、急性期病院としての医療提供体制の充実に継続的に取り組んでおり、昨年はロボット支援手術の導入のほか、糖尿病内分泌肝疾患センター、放射線画像診断センター、がんセンター、循環器内科、脳神経内科、予防医学センターをさらに強化しました。福岡山王病院や福岡中央病院とも連携し、昨年以上に診療提供体制を充実させ、『皆様に信頼される病院、地域の先生方に信頼される病院、そして何よりも働く職員が信頼できる病院』をめざして取り組んでまいります。本年もご指導、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

国際医療福祉リハビリテーションセンター

センター長 下泉 秀夫

徳島大学卒、医学博士。国際医療福祉大学大学院教授。社会福祉法人邦友会理事。



当センターは、栃木地区における障害福祉サービスの中核を担う拠点です。重度の心身障害児をはじめとして、心身の障害や神経発達症を持つ地域の患者様に、診療・療育・機能訓練・入所（短期含む）を提供する「なす療育園」や、身体に障害を持つ患者様の入所や日中活動サービスを提供する「サポートハウス那須」などがあります。

当センターは本年4月に開設25周年を迎えますが、行政および教育機関・保育施設・児童福祉施設と協力し、情報提供や健診・発達相談等への医師・メディカルスタッフの派遣、医療的ケアを必要とする児（者）や家族を支援するコーディネーターの養成など、地域にとってなくてはならない存在となっています。今後、さらにグループの医療機関や施設と緊密に連携し、より一層の機能の充実とサービスの向上に努めたいと考えています。本年も、ご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。

国際医療福祉大学成田病院

成田市制施行70周年記念事業で 中学生の院内見学ツアーを実施

2024年11月30日、成田市制施行70周年事業の一環として、成田市在住の中学生36人を対象に院内見学ツアーを実施した。看護師・リハビリスタッフ・臨床工学技士が各部門を紹介し、レストランでのランチも提供した。「普段見学できない所を見られてよかった」「将来理学療法士になりたいので話を聞けてよかった」などの感想が寄せられた。



●院内見学の様子



●レストランオープンでランチ

心不全の市民公開講座を開催

2024年12月14日、心不全チームの市民公開講座を開催した。循環器内科・杉村宏一郎教授をはじめ、薬剤師、看護師、管理栄養士、理学療法士が「チームで心不全に挑む」というテーマで講演を行った。参加者からは「各専門のスタッフがチームで治療に取り組んでいることに安心した」「スタッフの取り組みがよくわかり、体調がわるくなったらぜひ受診したい」「がんと同等の危機感を持っていなかったの、思考を見直すよい機会となった」などのお声をいただいた。

今回は2月7日の14時から、リハビリテーション科部長・角田亘教授（代表）とリハ技術部による「肺炎予防とリハビリテーション」を開催予定。



●心不全チームと質疑応答に
応える杉村教授

今年もイルミネーションがスタート

2024年12月18日、開院以来5回目となるイルミネーション点灯式を開催。北口玄関前に設置されたオブジェは、イルミネーションで当院のスタッフや患者様に楽しんでほしいという地元企業のご厚意によるもの。

点灯式には成田市の小泉一成市長・関根賢次副市長・うなりくんをはじめ、当院から吉野一郎病院長・伊藤淳子看護部長などが参加し、カウントダウンで約1万球のイルミネーションが一斉に点灯した。点灯期間は1月31日まで。

（総務広報課 畠山実大）



●イルミネーション点灯式

国際医療福祉大学病院

「健康フェア2024」と 中学生の社会体験活動「マイ・チャレンジ」

2024年10月27日、当院では「健康フェア2024」を開催した。このイベントでは、消化器内科、循環器内科、糖尿病・代謝・内分泌内科が講演と個別相談会を実施。また、脳神経内科が認知症関連の講演を行い、参加者には専門医の指導のもと、認知症予防体操を体験していただいた。そのほか、「病院探検ツアー」「模擬手術・看護ケア体験」「健康縁日」には、お子様連れのご家族や中高生が参加し、大変好評であった。

11月11～15日には、中学生の社会体験活動「マイ・チャレンジ」を受け入れ、地元の中学生男子1人、女子3人が当院にて職場体験を行った。生徒の皆さんは、5日間で薬剤部、看護部、予防医学センター、放射線室、検査室、リハビリテーション室、医事課で病院の業務を体験。初めて見る医療機器や患者様への対応に、緊張しながらも真剣な眼差しで学んでいた。

この体験を通して、医療現場で働くことの意義やすばらしさを感じてもらえることを願っている。

（総務課 水谷ゆりな）



●認知症セミナーの様子



●妊婦のモデル人形で看護ケア体験

国際医療福祉大学三田病院

医療連携協議会を開催

2024年11月19日、国際医療福祉大学東京赤坂キャンパスにて、医療連携協議会を開催した。コロナ明けの2023年、久しぶりとなる連携協議会を再開し、昨年に引き続き、今年も68施設107人の方に参加いただいた。

講演会では、池田佳史病院長より当院の医療連携について紹介した後、心臓外科部長の秋田雅史医師による「心臓外科の最新治療について（冠動脈バイパス術等）」と、池田病院長による「甲状腺がんに対する内視鏡手術」の2講演を行った。

第2部の情報交換会は、国際医療福祉大学の鈴木康裕学長のご挨拶から始まり、映像による当院の医師紹介のほか医療連携部長、副院長、病院長補佐からの話もあり、終始和やかな雰囲気の中で活発に意見交換がなされた。

今後も、地域の医療機関の皆様との連携を大切にし、地域医療の充実、積極的な救急受け入れに努めていきたい。

（総務課 山本悦子）



●池田佳史病院長（左）・秋田雅史医師（右）



●情報交換会の様子

国際医療福祉大学熱海病院

相模トラフ地震を想定した災害訓練を実施

2024年11月16日、相模トラフ地震による被害を想定し、災害訓練を行った。対策本部の初動訓練では、本部長の山田佳彦病院長による災害モードでの傷病者受け入れの宣言のもと、訓練を開始。30人ほどの模擬傷病者（小田原キャンパスの学生、県看護協会のスタッフ）や、当院救急部によってトリアージされた傷病者、病院入口でトリアージされた傷病者に対し、トリアージの色別に決められている傷病者受け入れの流れ、搬送班による搬送など例年どおりの進行で行われた。並行して、熱海市医療救護本部の設置を想定し、市職員と熱海・伊東地区統括災害医療コーディネーターにより、災害時の医療面における市の役割、病院と連携すべきことが確認された。

能登半島地震後、災害拠点病院としてますます注目されている当院の役割が、改めて再認識された有意義な訓練となった。

（皮膚科部長・防火防災委員長 堀内義仁医師）



●傷病者の搬送の様子

●災害対策本部

国際医療福祉大学塩谷病院

毎年恒例 手洗い教室の実施

当院では、毎年恒例の行事として、矢板・塩谷地区の小学校・認定こども園・幼稚園・保育園を訪問し、子どもたちへ向けた手洗い教室を開催している。

看護師3人がチームを組み、2024年10月中旬から12月初旬にかけて約20の施設を訪問。イラストや写真のスライドを使って、手洗いやうがいの大切さ・マスクの正しいつけ方などをわかりやすく伝えるとともに、「うさぎとかめ」の歌にあわせた正しい手洗い方法を紹介している。

子どもたちは「ばい菌マークのスタンプ」を手の甲に押してもらい、正しい手洗いに挑戦。スタンプが消えるように、念入りに手洗いを行っていた。「みんなで歌いながら、手洗いを楽しくした」「お家に帰ってからお母さんにも教えてあげる」など充実した時間であった旨の感想が寄せられた。

今後もこの活動を継続し、子どもたちにわかりやすく手洗い・うがいの大切さを伝えていきたいと考えている。

（総務・人事課 後藤文栄）



●手洗い教室の様子

国際医療福祉大学市川病院

千葉県献血功労者表彰

2024年10月22日に「千葉県献血感謝のつどい」が開催され、日本赤十字社千葉県支部から、当院の日ごろの献血の啓発推進活動に対して感謝状が授与された。当日は当院から出席がかなわなかったため11月25日、千葉県赤十字血液センターの宮木宏修氏が当院を訪問し、大谷俊郎病院長に賞状と記念品を手渡した。

今回の感謝状は、当院の長年にわたる献血協力が認められたものである。宮木氏は「深刻な血液不足の状況が続いている中、市川病院の貢献には大変感謝している。日本赤十字社の現場スタッフからも、市川病院は毎回受け入れ体制がとてもよいと聞いている」と述べられ、当院の柔軟な対応についても評価されていた。

現在、当院では年2回ペースで献血を実施し、職員への協力を呼びかけている。医療を支える献血活動の重要性を認識し、これからも長く取り組んでいきたい。

（総務人事課 高田聡）



●感謝状を手にする大谷病院長

山王病院

マタニティ心理カウンセリングを開始

山王病院では、女性の公認心理師・臨床心理士によるマタニティ心理カウンセリングを行っている。1月から増員し、より充実したカウンセリングをご提供している。

対象は、山王病院、山王バースセンターで出産予定・出産後の方を中心に、他院に受診中の方のご相談も承り、妊娠中のさまざまな悩みや育児に関する不安に対し、経験豊富なカウンセラーが一人ひとりにあった方法で解決に導くお手伝いのできる体制となっている。平日以外に土曜日のご相談枠も設けており、お話しされることで多くの利用者様の気持ちが楽になり、早期解決に向けて希望が持てるよう、今後も親身で丁寧な対応をしていく。

また、山王病院では、リプロダクション・婦人科内視鏡治療センターの改装に伴い、2024年11月23日に「リニューアルスペシャルイベント」として「さんのう健康講座」を開催した。リニューアルしたリプロダクションセンターは、患者様が待ち時間もリラックスしていただけるよう配慮した待合室のほか、採卵室・採精室および診察室や休憩室も一新、より快適に過ごしていただける工夫を施している。講座では、信頼と実績を誇る当院の不妊治療について、不妊治療経験者の皆様の体験談を交えて解説したほか、AMH検査と精子検査を無料で実施。さらに、施設見学や個別相談も設け、大変盛況であった。

（総務課）



●リニューアルした
リプロダクションセンター入口

各キャンパスの学生たちが思い思いに活躍するクラブ・サークルをご紹介します。

—— 東京赤坂キャンパス編 ——

バスケットボールサークル



MASHUP主催の大会にも参加

広がっています。年間100大会以上のバスケットボール大会を主催しているMASHUPが主催する学生限定のバスケットボール大会にも出場し、メンバー全員で力を合わせて楽しみながら競技に取り組みました。大会への参加は、日頃の練習の成果を発揮する場であるとともに、同じ趣味を通じて多くの学生と交流できるよい機会になっています。

初心者も大歓迎！気軽に始めてみませんか

バスケットボールサークルへの参加はいつでも歓迎しています。東京赤坂キャンパスの学生は、活動日（毎週火曜日18時～21時）に体育館まで直接お越しください。他キャンパスや他大学の学生は、サークルのInstagramにダイレクトメッセージをお送りください。活動日などの詳細をご連絡します。動きやすい服装と室内履きをご用意いただければ、すぐに活動に参加できます。見学だけでも大歓迎です。バスケットボールの経験は問いません。



体育館での練習の様子

未経験の方も、大学生になって少し体を動かしたいという理由でも、気軽にご参加ください。毎回の参加は必須ではなく、途中参加や途中退出も自由です。皆さんの参加をお待ちしています。

学年・学科を超えた交流の場

私たちのサークルでは、現在約25人が所属し、毎週火曜日の18時から21時まで、東京赤坂キャンパス3階にある体育館で活動しています。バスケットボールというスポーツを通じて、学年や学科の垣根を越え、メンバー同士の親睦を深めることを目的としています。コミュニケーションを大切にしながら、初心者から経験者まで誰もが楽しめる雰囲気づくりを心がけています。スポーツを通じた絆や交流はもちろんのこと、学業や日常生活では得られない新たなつながりを築く場として、多くのメンバーが積極的に参加しています。

他大学との交流や大会出場の機会も

東京赤坂キャンパスは、1学部2学科（心理学科、医療マネジメント学科）の小規模なキャンパスです。授業では交流が限られるなか、サークルは同じ学科の同級生だけでなく、他学年や異なる学科の学生同士が交流を深める貴重な場となっています。私自身も、サークル活動を通じて親睦を深め、学生生活をより充実したものにしています。

さらに、今年度からは他大学の学生も活動に参加できるようになり、学内だけでなく、他大学の学生との交流の輪も

Akasaka basketball club サークル長
赤坂心理・医療福祉マネジメント学部
医療マネジメント学科2年
水菓子 治哉

